

地域とともに

第2号



目次

■キャンパスミュージアムの活動について	2
キャンパスミュージアム運営委員会委員長 和田 秀樹	
■さまざまな地域連携のかたち	3
□静岡大学ガムラン演奏団の試み—異文化の楽器でつながる—	
教育学部准教授 小西 潤子	
教育学研究科修士課程2年 新井 和康	
□ものづくり理科地域支援ネットワーク「浜松RAIN房」の活動	
浜松RAIN房コーディネータ 藤田 晶子	
■イベント・活動等 報告	7
■地域向けイベントのお知らせ	9

キャンパスミュージアムの活動について

キャンパスミュージアム運営委員会委員長 和田 秀樹



私たち人類はいま、科学技術を発展させ、情報網を発達させ高速・濃密にすることにより、家に居ながら自然の姿や物を画像として見ることに慣れていますが、私たちは直接、物や自然に接することにより、人間の五感を通して物事を感じ考えることができます。生き物や文化の多様性を知り、新しい疑問を抱き、肌でそれを感じ取ることは、目や耳だけで見るものを遙かに超えるものです。

静岡大学は、1949年（昭和24）の創立以来、様々な教育や研究に取り組んできました。大学における創造的研究活動がどのようにして、またどのような物を通して行われてきたのかを知ることは、新たな活動の原動力となります。キャンパスミュージアムは、教育・研究を通して収集された貴重で多様な試資料、先輩たちが使い、その知恵が偲ばれる実験装置などを整理・保管し、学生の教育に資し更に今後活用できるように、また、静岡大学の知的財産をより広く社会に公開することを目指しています。

<常設展示>

大学の活動の歩みを語る貴重な文化的財産の一部を常設展示公開しております。

<企画展>

例年、11月の静大祭の期間にあわせて、特定のテーマの企画展を開催しています。

過去の企画展は次のとおりで、ホームページ*で詳細をご覧ください。

- 2004年度 富士山火山防災マップ
- 2005年度 静大考古学の50年
- 2005年度 分類学への招待
- 2006年度 静大生の南極
- 2006年度 南アルプスの自然
- 2007年度 南米コロンビアの蝶と蛾
- 2008年度 ガムラン～青銅のオーケストラの響き
- 2009年度 静岡大学のあゆみと教育・研究の現在
富士山展 富士山の過去と現在と未来
- 2010年度 赤石山地（南アルプス）の自然遺産

* URL : http://www.shizuoka.ac.jp/chiiki/c_museum/index.html



2010年 企画展「赤石山地（南アルプス）の自然遺産」

<生物調査>

静岡キャンパスは、名勝日本平の麓に位置し、みどり豊かな自然に囲まれた、駿河湾を南に、富士山を北東に見晴らす絶景の地にあります。この恵まれた自然を持つ静岡キャンパスを丸ごと市民の皆さんにも開放し、動植物の織りなすキャンパスの自然を堪能していただくことも大きな魅力であると信じています。そのために、2009年（平成21）から3年計画で、静岡キャンパスの生物調査を始めています。この調査の結果は来年度、皆様に公開する予定です。キャンパスに通う学生も教職員も、また、訪れる多くの市民も、かつては身の回りの何処にでもあったと思うような、また、日頃何気なく接している生き物をより深く知っていただきたく思います。そして、多忙な人間社会で忘れてしまっている身近な自然の楽しみ方を体験し、このキャンパスの生き物を発見していただきたいと考えています。



2009年夏 鳥類と哺乳類チームの合同調査

〈さまざまな地域連携のかたち〉

静岡大学ガムラン演奏団の試み ——異文化の楽器でつながる——

教育学部准教授 小西潤子／教育学研究科修士課程2年 新井和康



静岡大学にインドネシア・バリ島のガムラン1セットがあることをご存知だろうか？ガムランとは、「青銅のオーケストラ」とも呼ばれる打楽器群の総称であり、かつそれらによって奏でられる音楽も指す。ガムランは、楽器編成と演奏の違いにより主にジャワ様式とバリ様式がある。本学のもは、バリ様式のなかで現在最もポピュラーであるガムラン・cong・クビアルという24台の楽器群からなり、主に大小の鍵盤型や蓋付鍋型、吊り下げ型の打楽器から編成される。各楽器は、打楽器であるにもかかわらず音程が出せる。ただし、それはわれわれに馴染みのあるドレミとは異なる5音音階であり、しかも楽器ごとにチューニングが微妙にずれているので、合奏すると「ウォーンウォーン」とうねりが生じる。この不思議な響きが、演奏したり聴いたりする者の感覚を非日常的なものへと昇華させるのである。

実は、このガムランは2007年度（平成19）に大阪音楽大学より譲り受けた。楽器である以上、展示するだけでは勿体ない。そこで、翌2008年11月11日～17日のキャンパスミュージアム企画展をきっかけに演奏団を結成し、お披露目することになった。主力メンバーは、当時教育学研究科に在籍していたピアノ、声楽、サクソフォン、作曲、音楽教育を専門とする学生5人になった。とはいえ、その中でガムラン演奏経験者はおらず、唯一小西が学生時代にバリ島で1週間の特訓を受けたのみであった。正直言って困っていたところ、朗報が入り込んだ。農学研究科にバリ島

出身のイケトゥット・ムジャ氏が、静岡県内でケチャなど伝統文化活動をしているというのだ。早速、その指導教員・小嶋睦雄教授に紹介してもらったところ、ムジャ氏は子どものころ耳で覚えたメロディを思い出しながらガムランで再現していった。主力メンバーは、それを何度も聞いて数字譜に表した。こうして、バリからの留学生とガムランを初めて触る学生とが協働して、作品が出来あがっていったのである。

演奏団の名称は、ムジャ氏の提案により「ナーダ・ブラーマ・チャルヤ」とした。これは、サンスクリット語で「学徒のための」という意味らしい。演奏団といっても、サークル活動のようにメンバーを固定せずに、演奏の機会ごとに参加者を募集することにした。これにより、そのときどきの状況に応じた柔軟な活動を可能にし、より多くの学生が参加できるようにした。演奏活動に参加することで、まずは楽譜ありきで音楽を勉強している学生たちや楽譜が読めないことにコンプレックスを持っている学生たちの視野が広がっていった。バリの村で育った人たちは生まれたときからガムランを耳にしているので、人々の身体に音楽が染み付いている。だから、演奏者がお互いにその場の「空気を読む」ことで曲が仕上がっていく。楽器によって、リーダー役、合図役、テンポ・キーパーなどが定められており、お互いの様子を見ながら繰り返しの回数や速度、音量の変化、曲の終わり方が決まるのである。

その後、静岡大学のガムランは学生と地域との橋渡しの役割をするようになった。静大フェスタ（2009年5月、於：ツインメッセ静岡）、国民文化祭（2009年11月、於：焼津市文化センター小ホール）、静岡大学教育学部附属特別支援学校中学部生徒のガムラン体験（2010年4月、於：キャンパスミュージアム）、大学女性協会全国大会での演奏紹介（2010年5月、於：ホテルアソシア静岡）と、学内のみならず楽器を持ち出して演奏の場を学外にまで広げ、より多くの市民のみなさんに聞いていただけるような活動を展開してきた。ここでは、それらのうち2つの活動例を紹介する。

1例目は、第二十四回国民文化祭の一環として開催された「海のおもしろ民族学展」についてである。ナー



2008年 キャンパスミュージアム企画展



手作りモアイ像の前での演奏

ダ・ブラーマ・チャルヤは、ガムランの展示協力とワークショップを行った。普段はコンサート等に使用される小ホールに、国立民族学博物館（吹田市）の所蔵するさまざまな民具や舟、地元の児童生徒が製作した大きなモアイ像等が設置されライトアップされると、そこはもう異空間だった。その中で、わがガムランはきらびやかな光を放っていた。11月3日に行った演奏とワークショップでは、地域の人々、そして焼津市のスタッフの方々と交流ができた。参加した学生からは、「地域の方にガムランという異文化に触れてもらえてよかった」「(ワークショップで) 大人の方に何かを教えることは初めてだったので勉強になった」などの声が聞かれ、学外ならではの経験となった。また、「国民文化祭のスタッフの方の熱心さに驚かされた」という感想もあり、地域振興のプロフェッショナルから大いに触発された一日ともなった。

2例目は、2010年4月20日に実施された静岡大学教育学部附属特別支援学校中学部の「静大に行こう」という行事において、プログラムの1つとされた生徒たちのガムラン体験である。これを通じて、われわれは2つの「学びあい」を実践しその大切さを実感する



生徒たちに説明をする（向かって左が新井）

こととなった。1つ目は、「学部内の協働」による学びあいである。これまでのワークショップ活動では、来場者に「こんなふう演奏してみてください」と手本を見せるだけでやって済ませてきた。しかし、一人一人が強烈な個性を持っている特別支援学校の生徒たちには、それなりの配慮が必要である。教育学部の学生であっても、講義からえた知識や短期間の「介護等体験」実習経験からだけでは、生徒たちへの接し方がわからない。そこで、特別支援教育専攻の香野毅准教授と同専攻の学生2名の協力を得て、事前に生徒たちの様子や学校での取り組み、注意点などの助言を受けたのである。そして、それをもとに「附属特別支援学校ガムラン体験実施案」を作成した。また、2名の学生には当日生徒のサポートをしてもらった。

2つ目は、「フィールド学習」を通じての学びあいである。馴染みのある楽器の学びとなると、教える側にも教わる側も「なぜここから音が出るのか」といった根本的なことに疑問を持たずに見過ごしてしまう。しかし未知の楽器であるガムランの場合、生徒たちからの「なぜ」に丁寧に答えていく必要性に迫られる。もちろん、自分たちにも答えられないこともある。しかも、限られた時間の中で少しでもガムランの面白さを伝えねばならないという使命感も感じる。結果的には、意外なほど生徒たちの食いつきはよく、友だちと交代して演奏するときには「もう終わりなの?」と残念そうな生徒もいた。先生からは、「日ごろは大きな物音が苦手な生徒が、大音量のガムランに興味深く演奏しているので驚いた」という話も聞いた。

ガムランは、もともとわれわれにとって異文化のものである。しかも、われわれは「ちょこっと」触れる程度の演奏しかできない。このことを意識していることが謙虚さを生み、かえって人と人をつなぐ力を発揮するのかもしれない。われわれも、地域の人々と共にガムランを学ぶ立場にあるからである。いま学校で、大学で、地域で求められるのは、上から目線の知識を受け止める学習ではなく、学びあいの姿勢である。ガムランは、われわれにとってすでに物珍しい異文化の楽器であることを越えて、共に学ぶ力を引き出すツールとなった。われわれとガムランとの出会いは、それだけでも素晴らしい。ワークショップで地域の方々や子どもたちがガムランと出会えば、なお素晴らしい。しかし、そのガムランを媒介としてわれわれとみんながつながっていくこと—こうした活動を支援することに、地域社会への学びを支える大学の存在意義があるのではないだろうか。

〈さまざまな地域連携のかたち〉

ものづくり理科地域支援ネットワーク
「浜松 RAIN 房」の活動

浜松 RAIN 房 コーディネータ 藤田 晶子



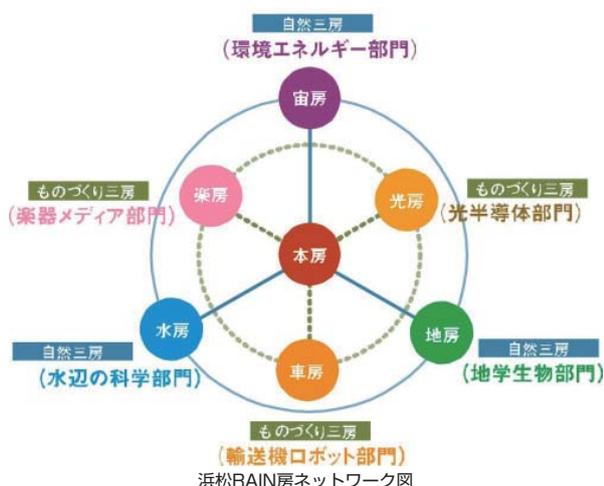
〈浜松RAIN房とは？〉

浜松RAIN房のマークを、見かけたことがあるだろうか。

浜松RAIN房は、2008年（平成20）7月に（独）科学技術振興機構（JST）の「地域ネットワーク支援」事業の支援を受けてスタートした、ものづくり・理科の学習・経験の場を提供する地域支援ネットワークで、現在、静岡大学工学部と浜松市・磐田市・湖西市・袋井市・森町とが連携し運営を行っている。

浜松RAIN房は、遠州地域のものづくり産業（輸送機器・楽器・光産業等）と自然（浜名湖・遠州灘・天竜川・北遠の森等）をバックグラウンドとする、ものづくり3房（車房・楽房・工房）、自然3房（地房・水房・宙房）及び本房（事務局・匠部門）からなる。2010年10月現在、約80団体（発足時17団体）がネットワークに参加している。

浜松RAIN房の名称は、ネットワークが7つの房（クラスター＝分野別グループ）からなることに由来し、虹の七色（レインボウ）にかけており、マークは虹をモチーフとしたデザインである。また、「RAIN」には、RApport between Industry and Nature（産業と自然との協調関係）という意味も含まれている。



〈浜松RAIN房の目的とコンセプト〉

遠州地域は浜松を中心として、世界に冠たる製造業の街として発展してきた。しかし、最近の若者の理科離れや技術者の不足には、大学をはじめ、地元の経営

者も大変強い危機感を抱いている。そのため、自治体、大学、企業、NPO等が地域に根差した優れた人材育成を目指すべく、小中高生や市民向けの教室等、独自の活動を熱心に行っている。

浜松RAIN房は、それらの機関をネットワークとして繋げ、活動支援を行うことで、地域に根差した継続的で広がりのある活動に発展することを目的としている。また、活動のコンセプトとして、次の3つを掲げている。

■本物に触れ、本物をつくり、本物を知る（ものづくり・自然科学の基本）

■人が教え、人が学ぶ：教えることが最高の学ぶ場である（教育の基本）

■情報・資源の共有（経験の共有）

理系人材の育成には、自然・もの・人（万物）と触れ合う経験が不可欠であり、このような経験の場が少しでも地域に広がっていくことを目指している。

〈浜松RAIN房の活動〉

前述の目的とコンセプトに基づき、主に、（1）ネットワークの構築、（2）情報発信、（3）地域への周知・普及活動、（4）各種事業への支援に関わる事業を行っている。

具体的な活動について、いくつか紹介したいと思う。（2）については、浜松RAIN房ホームページ（URL <http://train1.eng.shizuoka.ac.jp>）を使って、この地域で行われているものづくりや理科教室に関するイベントや情報が全て網羅されている、包括的でわかりやすい内容の発信を目指し、日々更新している。

中でも個人的なお気に入り「Rainbow's Cafe」で、ネットワークで活躍する人物の紹介をしている。現在の仕事、その仕事に就いたきっかけや仕事に懸ける思い、人柄がわかるエピソードなどを、Cafeに招いたゲストから、お茶を飲みながらお話を聞くような雰囲気掲載している。

どのゲストのお話も自身の経験にもとづいた大変興味深い話なので、子供達にとって何らかの参考になればこんなに嬉しいことはない。

そのほか、新聞・雑誌・マスコミ等への情報発信・



出演等も積極的に行っている。

(3) については、浜松RAIN房主催の講演会や教室を行っており、年1回開催される浜松RAIN房講演会では、普段科学に触れていない方でも気軽に参加して頂けるよう、比較的柔らかいテーマ設定を目指している。昨年は、「科学と音楽のコラボレーション」をテーマとし、「宇宙へ旅立ったバッハのプレリュード」と題した、宇宙物理学者の佐治晴夫氏（鈴鹿短期大学学長）によるピアノ演奏を交えた講演会を開催した。

今年は、宇宙ファンならずとも関心が高い小惑星探査機「はやぶさ」7年ぶりの帰還を記念し、「はやぶサの翼、イトカワの砂」と題し、はやぶさプロジェクトメンバーである、JAXAの國中均氏、安部正真氏による講演会を開催した。

(4) については、年2回の支援事業による経済的な支援を通じて、参加機関の継続的な活動のサポートを行っている。平成21年度は、27機関を支援し、約40回の参加型活動に6,000名余りの市民が参加した。

また、浜松RAIN房発足以来、地域の公民館、図書館、放課後児童会等から、「ものづくり・理科教室を開催したいが、何かいい講座はないか。」というお問い合わせを多数頂き、市民の潜在的な関心の高さやニーズを実感している。要望に応じて各参加機関に依頼すると、快く講座を開催して下さる。

その結果、これまでに「ほんとうによく飛ば紙飛行機教室」（静岡大学ヒコーキ部）、「偏光アート教室」（青空偏光観測会）、「木片ヨットづくり」（浜名湖海の駅連絡会）、「船の不思議発見講座」（ヤマハ発動機[株]）、「カルメ焼き・グミづくり」、「シャボン玉講座」（浜松理科教育研究会）等10件以上の講座が成立しており、「新たな活動の場の構築」が実現している。利用者の

口コミ効果もあり、年々問い合わせ回数も増えている。

この他にも、静岡大学浜松キャンパスの公開行事・テクノフェスタin浜松等、サイエンスイベントへの出展要請等を通じて、参加機関の継続的な活動を側面的に支援している。

<浜松RAIN房（事務局）の役割>

先日、ある参加機関の方から嬉しい報告があった。

夏に行われたサイエンスイベントでの出展を機に、今まで交流のなかった参加機関の方と意気投合し、この冬、新たな講座を一緒に開催するという。

浜松RAIN房がスタートして早2年。未だ道半ばではあるが、ネットワークが形になり、じわじわと浸透し、少しずつ成果という芽が出てき始めたように思う。

「ネットワークはある意味何もしない」とは、浜松RAIN房ネットワークの生みの親、藤間信久教授の言葉であるが、「究極のポリシー」だと思う。虹色に輝くのはネットワークを構成する人々なのだ。

地域連携事業に取り組む大学に対する地域の期待度は大きい。今後もネットワークで活動する人達とその活動が、この地域の空いっぱいに架かる虹のごとく、多彩に輝けるようなサポートに努めていきたい。

どこかで浜松RAIN房のマークを見かけたら、ぜひ足を止めてその活動を見て頂きたいと思う。



2010年8月 「青少年のための科学の祭典」での講座風景

イベント・活動等 報告 (9月～11月)

■公開講座「沼津の古代遺跡を考える」

日時：9月 4日 (土) 14:00～16:00
 9月11日 (土) 14:00～16:00
 9月18日 (土) 14:00～16:00

場所：沼津市民文化センター

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡を取り上げ、3回にわたって沼津とその周辺における古代の歴史を考えました。各回の講師・演題は以下のとおりです。

- ・ 第1回「古墳出現期の沼津」講師：滝沢 誠（静岡大学人文学部教授）
- ・ 第2回「農耕文化形成期の沼津」講師：篠原和大（静岡大学人文学部准教授）
- ・ 第3回「古墳時代後期の東駿河～埋葬施設からみる特徴～」講師：菊池吉修（静岡県教育委員会）

それぞれの回では、辻畑古墳をはじめとする大型古墳、愛鷹山麓の弥生時代高地性遺跡、北伊豆地域に特徴的な横穴墓群などを取り上げて、それらの遺跡に関する最新の考古学的成果をわかりやすく紹介しました。
 [生涯学習教育研究センター 金子]



■公開セミナー「学ぶって楽しい！～大学で学ぼう～」

日時：10月17日 (日) 9:15～12:15
 場所：静岡大学学生会館ホール

知的障害のある人が、学校卒業後も生涯学習の機会を持ち、より豊かな人生を送ることができることを目的に、「学ぶって楽しい！」と題する公開セミナーを実施しました。大学のキャンパスを学びの場にしようという趣旨の企画で、通算11回目となります。以下のようなプログラムで行われ、ボランティアの方々も含めたくさんの方々に参加いただきました。

- ・ 演習「アイスブレイク～学びのなかま～」講師：大畑智里（静岡大学教育学部附属特別支援学校教諭）
- ・ 講義1「日本の食文化を知ろう！」講師：新井映子（静

岡県立大学食品栄養科学部教授)

- ・ 講義2「世界の人と『こんにちは!』」講師：案野香子（静岡大学国際交流センター准教授）

[生涯学習教育研究センター 金子]



■講演会・見学会「忘れられた仏教天文学 小島龍津寺所蔵 須弥山儀の謎」

日時：10月17日 (日) 17:00～19:00
 場所：静岡市清水区小島 龍津寺

小島の名刹に保管されている「須弥山儀」という機械が、そもそもなんなのか、そこから何が見えてくるのか。江戸から近代に向かう宗教と科学と教育の歴史の大きな波の証言者である「須弥山儀」について、第一人者である天理大学の岡田正彦氏をお招きして講演会をおこないました。地域の祭礼と重なり、多くの皆さんが歴史の面白さ、文化財の大切さに触れる機会になりました。早くも次回を期待する声が多く、また実際に詳しい研究も進展しそうな展開になっています。

[人文学部 小二田]



■講演会・見学会「静岡ハリストス正教会のイコンと山下りん」

日時：10月23日 (土) 13:00～16:00
 場所：静岡市葵区春日 静岡ハリストス正教会

一昨年、授業で取り上げた、山下りん作品を含む静岡ハリストス正教会のイコンについて、今回は、イラストレーター・絵本作家の吉田稔美さん、美術史家の金沢百枝さんに講演をお願いし、新しく静岡の担当になられた田中仁一司祭の詳しい解説つきで見学させて頂く会を催しました。来場者は50名強、聖堂見学では熱心な質問もとびかい、意義深い見学会になりました。宗教施設ではありますが、静岡の貴重な文化財として次の世代に伝えていく気運が生まれることを強く望んでいます。 [人文学部 小二田]



■ 静大生が提案する「リーフ茶を売るためのアイデア」

日時：10月30日（土） 14:30～15:30

場所 グランシップ904会議室

（世界お茶まつり2010 出展者セミナー）

07年から09年にかけて開講した学際科目「茶の世界」の、09年度分の最終レポートの内から7人が茶業関係者の前で提案を行い、御意見をうかがいました。大学生の発表はお茶まつりの中でも珍しい企画で、茶業者だけでなく、一般来場者も多く、静岡新聞にも掲載されました。静岡の大学と茶業との関わり方の例として意義深いものと思います。世界お茶まつり2010開催中、授業関連の展示も行いました。

[人文学部 小二田]



■ 日経グローバル「大学の地域貢献度ランキング調査」で全国18位になりました

日本経済新聞社産業地域研究所が全国754の大学を対象に、大学が研究成果や人材を地域に役立てる「地域貢献度」について調査（回答は525校）したランキングが、地域情報専門誌『日経グローバル』（発行：日本経済新聞社産業地域研究所）に掲載されました。静岡大学は、総合ランキング全国18位（国立大学法人中では8位）、組織・制度項目ランキング全国2位、学生数と教員数を考慮しない絶対数ランキング全国6位になりました。

■ 日経BPコンサルティング「大学ブランド・イメージ調査2010～2011【北陸・東海編】」のイメージ項目「地域社会・文化に貢献している」で第1位となりました。

日経BPコンサルティングは、「首都圏」、「近畿」、「北陸・東海」、「中国・四国」、「九州・沖縄・山口」の5地域359大学を対象に、大学のブランド・イメージ調査を行いました。静岡大学は、北陸・東海編（調査対象63校）で総合6位、イメージ項目「地域社会・文化に貢献している」で1位となりました。

地域向けイベントのお知らせ（12月～3月）

■静岡大学・中日新聞連携講座

これからの〈まち〉の姿を考える

～工学&情報学の視点から～

【第3回】ガバナンス（情報共有と合意形成）からみた平成の市町村合併

日時：1月 8日（土） 14:00～ 16:00

【第4回】経営情報学からモノづくりのまち・浜松を考える

日時：2月12日（土） 14:00～ 16:00

【第5回】東海地震について考えるための防災ゲーム

日時：3月 5日（土） 14:00～ 16:00

場所：TKP浜松カンファレンスステーション
会議室1（浜松駅ビル「MAY ONE」4階）

<http://www.lc.shizuoka.ac.jp/event00046.html>

■静岡大学・コープしずおか連携講座

自分らしく生きる～豊かなライフスタイルに向けて～

【第4回】グリーンコンシューマーを目指して～地球環境も家計も守る～

日時：12月18日（土） 10:00～ 12:00

場所：静岡市産学交流センター（B-nest）6階
プレゼンテーションルーム

<http://www.lc.shizuoka.ac.jp/event00047.html>

■静岡大学開学60周年記念公開シンポジウム

静岡大学の足跡と未来への足音II

「それはいかに実現されたのか？」

【第6回】いま、再び〈いのち〉について考える

日時：12月18日（土） 13:30～ 16:30

場所：静岡市産学交流センター（B-nest）6階
プレゼンテーションルーム

<http://www.lc.shizuoka.ac.jp/event00032.html>

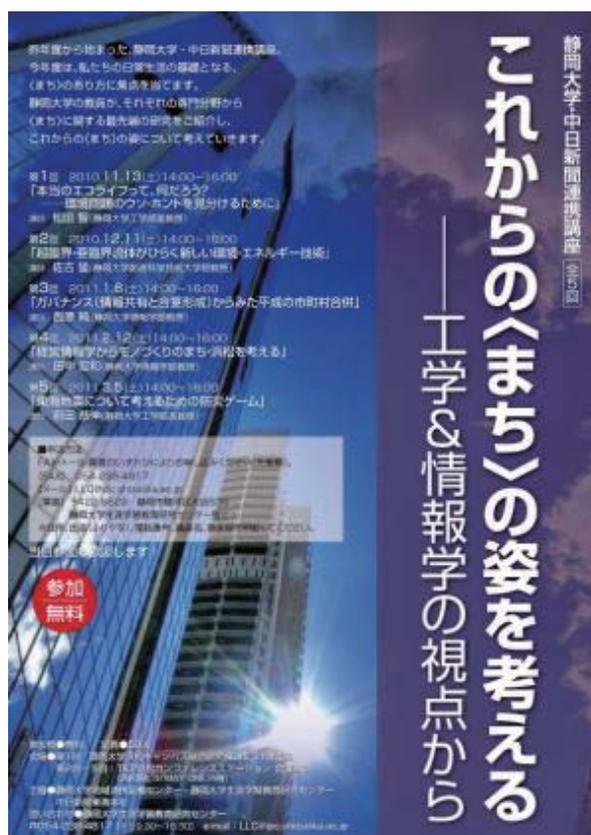
■サイエンスカフェ

【第48話】未来の画像技術～ナノビジョンサイエンス～

日時：1月20日（木） 18:00～ 19:30

場所：静岡市産学交流センター（B-nest）6階
プレゼンテーションルーム

<http://www.shizuoka.ac.jp/rigaku/sciencecafe/>



編集後記

今回の日経グローバル「大学の地域貢献度ランキング調査」で静岡大学は総合18位となりました。前々回が54位、前回は27位、今回が18位と着実に順位を上げてきています。これは、このニュースレターで紹介しているような教職員・学生の地道な地域連携活

動の賜物であると思います。

本センターは、学内外で行われている小さく地道な活動を見逃さず、紹介・支援していけるよう活動していきたいと考えています。

（研究協力・情報チーム 森本 真弘）

発行日 2010年12月13日
発行 静岡大学地域連携協働センター
編集 森本 真弘（研究協力・情報チーム）
連絡先 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学学術情報部研究協力・情報チーム
☎054-238-4902 E-mail: ochiiki@ipc.shizuoka.ac.jp
ウェブサイト <http://www.shizuoka.ac.jp/chiiki/>